

女性医師が集い、学び合いながら 多彩な活動に取り組む「JOYJOYの会」

熊本県保険医協会副会長、女性医師部会長

秋月 美和 あきづき みわ

1994年久留米大学医学部卒業。医学博士、乳腺外科医。熊本大学医学部附属病院、熊本赤十字病院、熊本市立熊本市民病院などを経て2007年、女性医師・スタッフによる乳腺専門外来「みわクリニック」を熊本市に開院。熊本県医師会理事、熊本市医師会代議員、NPO法人ピンクリボンくまもと代表。日本乳癌学会認定医、日本外科学会専門医、熊本市医師会乳がん検診班委員長など。裏千家茶道教授の資格も持つ。



1985年に男女雇用機会均等法が制定され、様々な分野で女性の社会進出が進みましたが、いまだにジェンダー平等の実現には至っていません。医療の分野でも女性医師の占める割合は年々増加、特に若い世代ほど高くなる傾向にあります。それでも、世界経済フォーラムが発表した2022年のジェンダー・ギャップ指数を見ると、日本は146カ国中116位です。

熊本県保険医協会の女性医師部会(通称JOYJOYの会)は、「女性であることがハンディとなることなくキャリアを積めるような社会を」という目的の下、1998年に保団連の加盟団体の中で2番目に発足しました。医科と歯科の職種の違いだけではなく、専門分野やキャリア、年齢も多

様な部会員で構成されています。かつ各々がNPOやボランティア活動などを通じて地域に貢献しており、その中で疑問に思ったことや不条理に感じたことなど、浮かび上がった課題を月1回の部会に持ち寄り検討しています。以下、これまでの主な活動について紹介します。

女性弁護士との交流

多様性という点では、板井八重子前部会長の頃からのご縁で、熊本県の女性弁護士との交流会を2012年から継続的に開催しています。司法と医療、違う視点から問題を考えることでお互いに刺激し合い、家庭の問題では専門職として働く女性として共感し合う。ここから何かが始まる予感がしました。

そんな中、2014年に熊本県でも性暴力被害者のためのワンストップ支援センターを設立することを聞き、交流会を開いて意見交換を行いました。それぞれがこれまで性被害問題に携わってきた経験と、すでに運用されている他県での情報を集約し、県警や性被害の相談を受けていた相談員にも交流を広げながら出た意見を提言としてまとめ2014年12月、「熊本県における性暴力被害者のためのワンストップ支援センターに関する要望書」を熊本県知事、県議会議長、県警本部に提出。記者会見も行い、反響を得ました。

そこで終わらせることなく、2015年9月に「性暴力被害者のためのサポートセンター、ゆあさいどくまもとに期待さ

れること」と題した集会を開催。警視庁が採用した6人目のキャリアで性暴力被害者救援をライフワークにしている当時警察庁警備局付の小笠原和美氏を講師に迎え、運用を開始したセンターの現状を考えました。この取り組みは、女性弁護士会との1年間にわたる取り組みの集大成となりました。

熊本地震の経験を提言に

2016年4月、熊本を震源とする最大震度7の地震がありました。それまでの常識を覆す2度の大きな地震、その後も絶え間なく起こる余震におびえながら、長期の避難所生活や車内泊を余儀なくされました。初めての経験のため、分からないことや問題点も多く、今後同じような災害が起こった時に役立つよう、教訓をまとめることにしました。

特に、表には出てこない避難所で起こる性暴力や、心に傷を負った子供たちのケア、緊急持ち出し袋のアイテムなど、女性の視点からの提案も多く、2017年に「熊本地震から学んだ安心・安全な避難生活のための提言」を熊本県知事、熊本市長に提出しました。この提言をまとめる際にも、実際に避難所運営に関わった人々や臨床心理士、助産師な

ど多職種の参加がありました。

この他、2018年6月、子供の貧困や親の経済格差などの様々な社会的視点から、多数歯う蝕という子供の健康被害・健康格差を、他の18都道府県協会に倣って熊本協会でも女性医師部会から提案し実施しました。県下の全小学校、中学校、支援学校を対象に、養護教諭とも交流を深めながらまとめたものです。併せて2年前の熊本地震と受診控えの関連についても調べましたが、明らかな相関は認めませんでした。

2019年からは女性と子供の貧困、児童虐待問題をテーマとして、新たな交流の幅を広げています。

「女性医師部会」の必要性

ジェンダー平等を唱えながら「女性医師部会」というネーミングで男女を区別している

ことに、違和感を覚える人もいるかもしれません。しかし、何の取り組みもなしに平等が実現されることはないため、女性を中心となった組織的な取り組みも必要になります。

発足時より、「将来的に医歯学部女性の比率が高まり、女性医師の役割が重要になるであろう」ことを予想し、女性医師の就労環境改善のための活動を続けてきましたが、社会が女性医師のキャリア支援の方向へ変化してきた一方で、医学部入試における女性差別問題も発覚しました。

今後も引き続き、医療現場のワークライフバランスの是正など、女性医師だけでなく男性医師も働きやすい、無理なく定着できる環境整備に力を入れていきます。また、多職種との交流を続けながら、様々な社会的問題にも取り組んでいきたいと思えます。



「JOYJOYの会」のメンバー。右から2人目が筆者